



The Cinema of UCG Choice

皇太子妃のレンジローバー、
女王のディフェンダー

『クイーン』

4月14日(土)公開
シャンテシネ、新宿武蔵野館、
シネリーブル池袋ほか全国にて

“ロイヤル・ワラント”とは英国王室御用達のお墨付きだ。最終的な判断を下す資格者はエリザベス女王、その夫のエジンバラ公、チャールズ皇太子、そして数年前まで存命中だった皇太后の4人。それぞれが与えるものなので、ひとつしか持たない製品もあれば複数持っている製品もあり、当然ながら4つすべてを持つものは数えるほどしかない。ランドローバーは4つのワラントを持つ唯一の自動車メーカーで、王室を舞台にした話題作『クイーン』では女王の愛車としても登場する。そのクルマとはレンジローバー……ではなく、軍用にも使われているディフェンダー。1948年に発表された第一号ランドローバーの流れを、いまだ頑なに守り続けるクルマだ。

物語は1997年、ダイアナ妃の事故死から始まる。そのニュースが王室に飛び込んできたのは、バルモラルの広大な領地で夏期休暇の最中だ。世界中の要人が悲しみの声明を発表する中、女王は「民間人である彼女の死は王室と無関係」というスタンスを崩さない。王室の冷淡さにヒステリックに反応する国民に、エジンバラ公は「王室をナメとるんか!」と終始ご立腹、一方チャールズは「あまり冷たくすると、狙撃でもされるのでは」とビビりっぱなし。女王は英国国民の冷静さを信じる一方で、威厳ある王室は時代

遅れなのかと葛藤する。折しも鹿撃ちのシーズン、女王はディフェンダーにチャールズを乗せて、でこぼこ道をガクンガクンしながら狩りに出かける。レンジローバーを使う息子は「新車に替えたら?」と問うが、女王は「なぜ?まだ動くのに」と答える。19年ぶりの労働党政権、史上最年少のブレアが首相に就任、王室不要論まで飛び出す中、ディフェンダーは時代のムードに流されて威厳を失うまいとする女王の象徴なのだ。



ところがその愛車がついに動かなくなってしまう。ひとり山に残された女王が人知れず涙し、ついに国民への譲歩と思える決断を下すのだが、彼女への尊敬は決してなくなる。

ラグジュアリーで見栄えのするダイアナがレンジローバーなら、ディフェンダーは“世界で唯一の四駆メーカー”という本懐を支えるシンボルだ。英国国民の質実剛健は生きていたのである。

事実にはできるかぎり忠実に作られた物語で、若き日のブレアってこんなにいいヤツだったのかと驚いた。最近じゃアメ車に乗ってるんじゃないかと思うほどアメリカびいきだが、愛車はレンジローバーらしい。

渥美志保

映画ライター、コラムニスト。数々の人気雑誌に映画関連のコラムを執筆している。映画に登場するクルマで最も好きなのはボンドカーのアストン・マーティン。